

Title	社会的ネットワークが与える瘦身願望への影響力：若年女性の痩せ問題解決に向けての提言
Sub Title	
Author	柘植, 尚志(Tsuge, Hisashi) 後藤, 励(Gotō, Rei)
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2018
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2018年度経営学 第3457号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002018-3457

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程

学位論文（ 2018 年度）

論文題名

社会的ネットワークが与える瘦身願望への影響力—若年女性の痩せ問題解決に向けての提言—

主 査	後藤 励
副 査	大藪 毅
副 査	木村 太一
副 査	

氏 名	柘植 尚志
-----	-------

論 文 要 旨

所属ゼミ	後藤励 研究会	氏名	柘植 尚志
(論文題名)			
社会的ネットワークが与える瘦身願望への影響力—若年女性の痩せ問題解決に向けての提言—			
(内容の要旨)			
<p>本研究は、痩せの社会的ネットワークの影響力が個人の瘦身願望・瘦身行動へどのように関連しているかを検討することを目的とした。</p> <p>痩せの社会的ネットワークの影響や関係性については、既存研究では、他人志向性と瘦身願望について定量的に把握されてきた。しかし、社会的ネットワーク内でつながっている他人の体型が、瘦身願望に影響しているかは、これまで明らかにされていなかった。そこで本研究では、シルエット図選択法により、アンケート回答者が構築している社会的ネットワーク内の友人や知人、良く会う同性、魅力的な異性、自己の体型認識を定量化し、そのデータを基にロジステック回帰分析により、痩せと社会的ネットワークの関係性を定量的に把握した。</p> <p>関東圏を勤務地とする小売業に勤める入社3~5年目の20歳代の女性90名、男性59名を対象に瘦身願望、ダイエット経験、経済的合理性・非合理性の考え方、TV・雑誌の視聴時間、主観的体型認識について測定した。その結果、普通体型の女性では、友人が自分より痩せていたり、良く会う同性や良く会う魅力的な異性が自分より痩せていると瘦身願望が高いことが示された。この結果から、周囲にどのような体型の人がいるか、どのような体型の人とネットワークを作るかによって、瘦身願望や自己の体型に影響を及ぼすことが示唆された。また、社会的ネットワークの関係性は、女性の痩せ体型者においても確認することができた。女性の痩せ体型者は、友人2人が自分より太っていると自分も太ろうとする傾向が強く、メディアの影響や個人的要因（経済合理的な考え）より友人2人が太っていることによる相関が強いことが示された。つまり、痩せ体型を改善させるためには、個人的要因やメディア（外的要因）より、親密度の高い社会的ネットワークの影響の方が受け入れられ易いと考えられる。しかし、本研究のアンケート調査の限界として、痩せようと思っている瘦身願望の高い人が、意識的に痩せている人と一緒にいるケースや、痩せている人が太ろうと思ひ、意識的に自分より太っている人と一緒にいるケースなどは排除できていない。つまり、社会的ネットワークが瘦身願望に影響を及ぼしているという因果関係は明らかにすることができていない。しかし、上記ケースにおいても、痩せている人は周囲の人を痩せの方向に向かわせ、肥満者は周囲の人を太る方向に向かわせるという影響力は同じである。従って、本研究で得られた結果から社会的ネットワークの力によって瘦身願望や瘦身行動を促進させることや、逆に抑制させることも可能であることが示唆された。</p>			

目次

I. はじめに	4
I-I 女性の痩せ問題	5
I-II 痩せによる健康への影響.....	6
I-III 日本、他国の痩せ問題の取組み.....	7
II. 先行研究レビュー.....	8
II-I 経済的アプローチ（経済合理性/非合理性）.....	9
II-II 心理的アプローチ「個人の損得意識」.....	10
II-III 社会的規範アプローチ（社会・周囲からの影響）.....	11
II-IV 先行研究レビューのまとめ.....	14
II-V 本研究の仮説.....	15
III. 調査方法.....	16
III-I 参考論文 肥満の社会的ネットワークの影響力.....	16
III-II アンケート調査 シルエット図選択法の活用.....	18
III-III 調査参加者と調査手続き.....	19
IV. 結果.....	23
V. 考察.....	31
V-I 本研究の限界.....	33
VI. 結論.....	33
参考文献.....	34
付録.....	38
謝辞.....	39

I. はじめに

わが国の国民医療費は、2013年度に総額が初めて40兆円を超え、その後も40兆円以上で推移している。2016年度の国民医療費は42兆1,381億円となり[1]、10年間で9兆105億円増加（人口一人当たりでは7万2,700円増加）している。

一方、日本の総人口は、1970年代後半から人口増加率が低下し、2004年から2005年の人口増加率はマイナスとなった。それ以降も横ばいで推移しており、日本は出生数の減少により人口減少局面を迎えている。今後も年少人口と生産年齢人口は減少が続き、2060年には高齢者率は40%近い水準になると推計されている。それに伴い、平均寿命は今後さらに伸長し、2060年には男性84.19歳、女性90.93歳に到達すると見込まれている[2]。さらに、我が国の人口について国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」における出生中位（死亡中位）推計を基にみると、総人口は、2030年の1億1,662万人、2048年には1億人を下回る9,913万人、2060年に8,674万人になると見込まれている。また、生産年齢人口（15～64歳の人口）は2010年の63.8%から減少を続け、2060年には50.9%になるのに対し、高齢人口（65歳以上の人口）は、2010年の2,948万人から団塊の世代及び第二次ベビーブーム世代が高齢人口に入った後の2042年に3,878万人とピークを迎える。その後は一貫して減少に転じ、2060年には3,464万人となる。そのため、高齢化率は2060年には39.9%、2.5人に1人が65歳以上となることを見込まれている[3]。

以上のように、高齢化に伴う、医療・介護等の社会保障支出の増大や生産年齢人口の全世界に占める割合の減少により、社会保障の維持や財政健全化に対し影響が及ぶことが懸念されている。社会保障制度を安定的に維持し、財政の健全化のためにも社会保障費の中で支出の割合が大きい医療費の削減が課題となっている。国は、年々の医療費増額を抑えるために、個人の健康管理に係る自発的な取組を促す観点から、セルフメディケーションを推進している[4]。2017年1月からセルフメディケーション税制がスタートし、日本再興戦略において健康寿命を延伸する医療保険適用外の健康増進・予防を促進する施策や市場・産業創出を促している。ヘルスケアビジネスとしても生活習慣病対策や高齢者の運動促進による健康寿命の延伸に関わる市場が拡大している。しかし、現在のヘルスケアビジネスの常識として健康増進・予防による健康寿命の延伸というのは、肥満対策や高齢者健康対策(食事・運動)としての位置づけが高くなっており、製品・サービスもコモディティ化の傾向にある。

そこで、より一層の医療費の削減や健康寿命を延伸するためには、新しいヘルスケアの取り組みが必要であると考えられる。そのためには、現在のヘルスケアの常識となっている、健康増進・予防＝肥満対策や高齢者健康対策（食事・運動）といった業界の境界を引き直し、顧客価値を再定義し、顧客の価値を創造することが必要である。

I - I 女性の痩せ問題

厚生労働省による平成 28 年度の国民健康・栄養調査では、成人女性における痩せ（BMI18.5 未満^{*1}）の割合は 11.6%であり、過去 10 年間で有意に増加している。なかでも 20 歳代女性における痩せの割合は 20.8%である。成人女性における肥満者（BMI25 以上）の割合は 20.6%であり、過去 10 年間で有意な増減はなく、20 歳代女性における肥満者は 8.9%である。すなわち、20 歳代女性の 5 人に 1 人は痩せ者である。なお、成人男性においては、痩せの割合は 4.4%、肥満者は 31.3%と過去 10 年間その割合は変わっていない。このことから女性において痩身志向のあることが伺える。20 歳代女性の理想 BMI が低く（平成 22 年の国民健康・栄養調査）、1 日あたりの平均摂取エネルギー量は平均 1628Kcal であり、18~29 歳の平均的な身体活動量の女性の必要エネルギー量 1950Kcal（日本人の食事摂取基準 2015 年版）をはるかに下回っていることが確認されている[5]。しかし、日本では肥満対策が蔓延し、太っていることによる健康リスクについてのみ報道され、若年女性の痩せの健康リスクについて報道されることはほとんどない。では、痩せていることは、太っていることより健康に良いことなのか。痩せによる健康リスクは、ないのであろうか。

I-II 痩せによる健康への影響

やせ願望は、日本だけでなく世界中の若い女性にみられる現象である。だが、実際に若い女性で痩せが増加しているというデータは、日本以外ではほとんどみられていない。現代の日本人女性では10代後半から20代前半にかけて平均BMIが減少しており、このような不自然な傾向は米国人男女や日本人男性にはみられない独特のものである[6]。現在では、成長期の女兒から体重増加が必要である妊婦にまでやせ願望がみられる。実際に肥満していることよりも自身が肥満していると感じ、やせ願望をもつことが、自己評価の低下やうつ傾向などの精神的問題と関連することが報告されている[7-9]。また、不必要または不健康なダイエット行動は、摂食障害などの健康障害と関連することや[10]、不健康なダイエットをしている人のほうがかえって肥満になりやすいという報告もある[11, 12]。減量行為により体脂肪が減少しすぎると、神経性食欲不振症を招いたり、免疫機能が低下したり、卵巣機能の低下によって栄養素の欠乏や月経不順の原因となることが先行研究によって指摘されている[13-15]。そして、無排卵が長期化し女性ホルモン・エストロゲン値が低い状態が続くと、骨形成が満足に行われず、骨密度の低下[16]を招き、健康寿命に関わる骨粗しょう症のリスクが高まる。また、女性の痩せは、死亡率の上昇や[17, 18]、低出生体重児出生率の上昇[19]、出産数の低下[20]などを招くことが報告されている。実際、低出生体重児の出生率は、女性の痩せの割合に比例して年々増加している。低出生体重児は将来糖尿病や高血圧といった生活習慣病発症リスクが高くなる(胎児プログラミング)ことが明らかになっている[21]。従って、妊娠前の母体の痩せ過ぎや妊娠後の体重増加抑制行動が、将来の世代の健康にも悪影響を及ぼす可能性が高い。

このように、若年女性の痩せ問題を放置し続けることは、女性の健康リスクを増大させるだけでなく、少子化をより一層深刻化させ、次世代へ悪影響を及ぼし続けることになる。しかも、このような問題を多くの人には認識すらしておらず、国や民間企業は痩せ問題を解決する取組みは全くできていない。このような問題をヘルスケアビジネスとして顧客の価値を再定義し、新しい市場を開拓し、問題を解決する必要がある。

I-III 日本、他国の痩せ問題の取組み

以上のことから、若年女性の痩せ問題は深刻な課題であると言える。では、日本や他国では、痩せ問題を解決するためにどのような対策や取組みを行っているかを報告する。

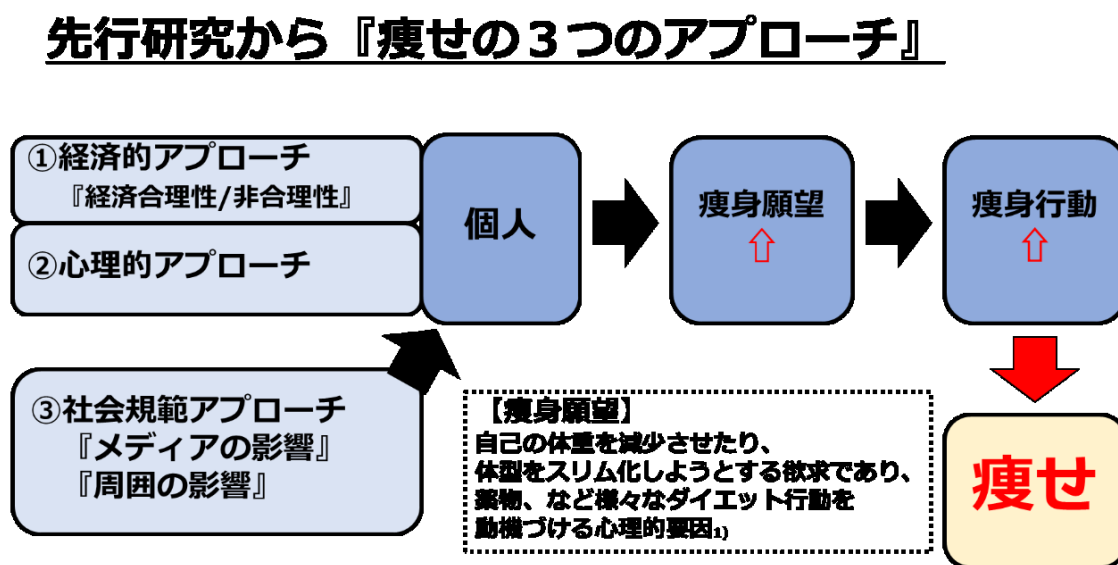
スペイン(2006年)では、若い女性の摂食障害を誘発するとしてBMI18以下のモデルのファッションショー出場を禁止した。その後、フランスでも過度のダイエットを勧めるような広告を取り締まる法律が上院で可決され、若い女性のやせ願望を煽ることを問題視する動きが世界的に広がっている。

日本においては、健康日本21などで、女性の痩せを減らすという目標は掲げられているが、まだ具体的な解決策は示されていない。2011年に福井県で女性の健康づくり対策として20~30歳代女性における痩せ問題を解決する取組みが行われた。取組み内容は、痩せによる健康リスクを認識させる教育やカメラ付き携帯電話を活用した食事診断システムによる栄養相談の実施である。食事や生活に関する保健指導を約2ヵ月間実施し、約1割の者が痩せを回避した[22]。この取組みから、痩せ問題の解決には、適正食量や適正体重・BMIの目標値、痩せによる健康リスクなどの健康情報を与えるだけでは足りないことがわかる。実際、世の中にはダイエット食品、エステティックサロン、フィットネスクラブ、痩身用運動器具、痩せる衣服や下着など様々なダイエット関連商品は若年女性に広く浸透しており、ダイエット行動が習慣化、定着化しているように思われる。では、習慣化、定着化した若年女性の痩せようとする行動を変容させるためには、どのようなアプローチが必要となるのか。また、そもそも、なぜ若年女性は健康リスクを冒してまで痩せたいと願い、ダイエットに励むのであろうか。痩せなくてはいけない理由や太れない理由が存在しているように思われる。

Ⅱ. 先行研究レビュー

先行研究より、若年女性を痩せに向かわせる要因（痩せなくてはいけない理由、太れない理由）として3つのアプローチ【図1】が挙げられる。この3つのアプローチ（①経済的アプローチ、②心理的アプローチ、③社会規範アプローチ）により個人の瘦身願望が高まり、瘦身行動（ダイエット行動）が促されて若年女性が痩せていくことが報告されている。つまり、この3つのアプローチを利用することにより、若年女性の痩せようとする行動を変容させることができる可能性がある。

【図1】 先行研究から考えられる『痩せの3つのアプローチ』



出所) 1) 馬場安希・菅原龍介: 女子青年における瘦身願望についての研究, 教育心理学研究, 2000, 48, 267-274

瘦身願望：馬場・菅原(2000)は、「自己の体重を減少させたり、体型をスリム化しようとする欲求で、食事制限、薬物、エステなど様々な瘦身行動を動機付ける心理的要因」と定義している[23]。

II-I 経済的アプローチ(経済合理性/非合理性)

1つ目のアプローチである経済的アプローチについて紹介する。

痩せを改善できない人や痩せている人は将来の健康リスクを過小に評価し、短期的利益を求めている傾向にある。つまり、経済非合理的な考え方をしている可能性が高い。

生活習慣の改善を妨げる人間行動の特徴を【表1】[24]にまとめた。将来病気になると言われても先のことはどうしても真剣に考えられない「現在重視の時間選好」、何パーセントの確率で病気になると言われても自分は大丈夫だと思う「客観確率と主観確率の乖離」。病気になるならなればいとリスクを好む(「損失局面でのリスクを好む選好」)人もいる。病気の予防を決意してもいざ行動を起こす時になると先送りしてしまう「時間非整合的な時間選好」。このように、生活習慣を変えられない人は、将来のリスクを過小評価し、直近に得られる報酬を重視してしまう「近視眼的」である傾向が強いと報告されている。痩せにおいても同様のことが考えられる。従って、このような人たちに将来の病気や標準的な食事量や体重・BMI等を説明しても限界がある。また、世の中には【表1】のような人間行動の特徴を利用して人々に消費を促すマーケティングが溢れているため、単に健康情報を与えても健康リスクを回避することは困難である。先に述べた、福井県の女性の健康づくり対策の効果があまり得られなかった要因としてもこのようなことが考えられる。では、なぜ若年女性は経済非合理的行動をとり、痩せようとするのか。痩せなくてはいけないのか。その根本となる若年女性の心理的要因を次に紹介する。

【表1】 生活習慣の改善を妨げる人間行動の特徴

行動の特徴	生活習慣への影響
現在重視の時間選好	将来の疾病予防の利益を過小評価
客観確率と主観確率の乖離	(リスクが高い人で)将来の疾病リスクの過小評価
損失局面でのリスクを好む選好 (利得局面での確実性を好む選好)	将来の疾病リスクを安易に受容
時間非整合的な時間選好	予防行動の先送り

II-II 心理的アプローチ「個人の損得意識」

痩せるための手段は食事制限、運動、エステなど様々であるが、いずれも、いわゆる個人の「瘦身願望」によって動機づけられた行動と考えられている。瘦身願望の背景として、多くの研究者が指摘するのは社会文化的な要因である。「痩せた女性が美しい」とする現代の美意識は、アメリカにおいて1960年代頃から急激に広まったとされる[25]。その後、欧米人の体型や顔を理想とする日本人にもその規範が浸透し、現在ではすでに脅迫的な水準にまで達し[26]、女性は痩せているということが魅力の1つとして捉えられている。また、若い女性のみならず、日本社会全体においても痩せていることは賛美される傾向にある。

日本の女性向け雑誌はかなりの割合がダイエット行動に関する記事や広告で占められているが、その中でダイエット体験談としてのサクセスストーリーなども頻繁に紹介されている。こうした報道や広告などを通じて、痩せていなければ幸せになれない、痩せれば幸せになれるという身体観が女性たちに繰り返し植え付けられてきたと考えられる。つまり、現代の若年女性にとって「身体」は幸福獲得のための重要な「手段」として認識されており、コントロールの対象として関心を向けられている。このような社会的背景から考えると、個々人の瘦身願望の強さは、自己の身体を今よりスリム化することが、自己の幸福にとってどの程度有効であるかによって規定されるとみることができる。すなわち、痩せることによって期待できるメリットをより多く見積もるほど、あるいは、現在の体型のままであることによるデメリットをより多く見積もるほど、その個人の瘦身願望は高くなる[23]。そして、痩せることによって達成しようとする目標を明確に持つ者ほど、瘦身のメリット感や現体型のデメリット感も高くなると報告されている[23]。痩せることによって達成しようとする目標として、社会的評価の維持、高揚（他者からの否定的評価を回避しようとする拒否回避欲求や他者からより高い評価を得ようとする賞賛獲得欲求）と自尊感情の回復、高揚（スリムな体型になることで望ましくない自己像を補償し、自尊感情を高めようとするもの）が報告されている[27]。つまり、瘦身願望は、他者視点からの「拒否回避欲求」や「賞賛獲得欲求」。自己視点からの「自己不全感からの脱却」といった若年女性の欲求を「瘦身」として手段を用いて満たそうとすることによって高まることが明らかにされており、瘦身願望が高い者は、ダイエット経験が豊富であり、過激なダイエットを試みる傾向があることが明らかになっている[23]。このような心理的欲求から瘦身願望が高まり、経済非合理的な行動（不必要なダイエット、過剰なダイエット）をとっていると言える。

Ⅱ-Ⅲ 社会的規範アプローチ(社会・周囲からの影響)

では、そもそも痩せた身体を尊ぶ社会風潮はどのように形成され、またどのように維持されてきたのか。こうした身体観は、マスメディアや友人関係などから作り上げられた社会的規範の影響を受けた結果であると報告されている。

【メディアの影響】 社会からの影響

「痩せ」を美しいとする社会風潮の形成にマスメディアの影響が大きく関わっていると言われている。女性向けの雑誌では 体重減少をテーマにした特集がしばしば組まれており、テレビや雑誌を見ていて「やせる」というメッセージに遭遇しないことは、まず有り得ないといっても過言ではない。また、テレビや雑誌に登場するモデルや女優たちはいずれも細身である。Becker(2002)らは、伝統的にふくよかな体型が理想とされてきたフィジーで、テレビ放送実施前後における 10 代女性の食行動の変化について報告している[28]。テレビが普及した後の 1998 年調査では、69%が体重減少を目的に食事を制限した経験があると回答し、74%が自己の体型を「太っている」あるいは「太り過ぎている」と回答した。テレビが普及する前の 1995 年調査と、普及後の 1998 年調査とでは、対象者の平均 BMI に差は見られていない。わが国で女性向け雑誌購読と女子大学生の「やせ」志向との関連を検討した小澤らの報告[29]によると、年間発行部数が 40 万部を超える女性雑誌 9 誌のうち 1 誌以上を定期的に購読していた群では、ほとんど読まない群に比べて理想体重を標準体重の 85%以下とする割合が約 2 倍であった。このように、痩身モデルが登場するテレビや雑誌等のメディアが、若年女性のダイエット行動の原因であると主張する文献が多く見られる。諸井, 小切間 (2008) は、若年女性のダイエット行動について、「メディア情報の影響→痩身願望→ダイエット行動」という枠組みを設定している[30]。これは、テレビや雑誌などで、痩せたモデルたちが映像で繰り返し流されることによって、無意識にその身体を理想体型として規範化し、自分の身体と痩せたモデルを比べる。そして、理想体型との差を自覚し、痩身願望が生まれ、ダイエット行動を起こすということである。インターネットやテレビなどによって、痩せたモデルなどを目にする事が多く、その影響力は非常に大きい。メディアのうち特にテレビと雑誌が大きく影響を及ぼす可能性が示されている[31]。

しかし、メディアにさらされている誰もが痩身願望が喚起されダイエット行動を起こすわけではない。痩身願望の喚起とダイエット行動を起こさせる最大の危険因子として注目されているのが、痩身理想の内在化である。(『痩身理想の内在化：見た目に関する社会

文化的な基準を、自分自身の価値観として取り込むくらいに受け入れることと定義されている[32-34]。』) 瘦身理想の内在化は、社会文化的影響と体型不満感を媒介することが明らかにされており[35]、長期的に体型不満感を悪化させる要因であることも明らかにされている[36,37]。つまり、メディアからの影響を受けた結果、どれほど瘦身理想を内在化したかは、先に述べたように個人の心理的要因である自己視点(瘦身の損得感情に影響を与える自尊感情)とともに、他者視点からの社会的評価(拒否回避欲求、賞賛獲得欲求)の影響を強く受けていると考えられる。そして、その影響度は、日常生活でどのような周囲(友人、知人、他人)と接し、どのような関係を持っているかによって異なるのではないかと考えられている。

【友人からの影響】 周囲からの影響

上記のように、瘦身願望に与える要因として個人の特性(自尊感情)だけでなく、社会的要因の存在が考えられている。そして、その対象は身近で親密度の高い友人からの影響が強いのではないかとされている。前川(2005)は、自分の周りの同年代の仲間に体重、食事に対して関心が高い者が多いことが、本人のダイエット行動や瘦身願望に関係していることを指摘している。また、ダイエットをしている女子学生の多くが、友人に自分の体型をからかわれた経験を持ち、体型に関してからかわれた経験が本人の瘦身願望を促進することも指摘している[38]。田崎(2018)では、瘦身願望は友人への同調性の高さ「友人と一緒にいること」を求める心理的背景に関連していることを明らかにしており、瘦身願望に影響を及ぼす要因として友人の目を気にしていることを示唆している[39]。しかし、このことは、自分の友人が皆「自分より痩せている」ことが前提でなくては成立しない。この答えとなり得る研究として、今田(1996)は、161名の学生を対象に「あなたと同じ性、同じ背丈で、あなたより体重の重い人はこの大学にどれくらいいると思いますか」と質問し、パーセントで回答させた。その結果は、女子学生では平均33.5%であった。もし全員が正しく自身の体型を認知していれば、値は限りなく50%に近づくはずであるため、全体的に自らの体型を実際以上に太めに評価していたと今田は述べている[40]。しかし、この調査結果は「自分が太っていると思っている」のではなく、自分の周りの人間が「自分より痩せていると思っている」と解釈することもできる。そうであるならば、自分の周りの友人が自分より痩せているから、「一緒にありたい」ために自分も痩せたいと思うようになることができる。また、瘦身願望に影響を及ぼすものとしてFat talkが示唆されている。Fat talkは、友人や家族との間で生じる体重・体型・エクササイズ等に関する会話であり[41]、太ることに対する嫌悪・

抵抗を示す内容が含まれていることや女性同士の会話で起こることが多いのが特徴である。そして、Fat talk が身体不満に影響を及ぼすことが明らかになっている[42, 43]。

以上のこのことから、友人同士の日常的な会話の中で Fat talk が起こり、その Fat talk に対して同調することを繰り返すうちに、体型に不満を感じるようになる。そして、友人が自分より痩せていたら（自分より痩せていると認識したら）友人と一緒にであることを求め、友人の目を気にすることにより、瘦身理想が内在化され、瘦身願望が高まり、ダイエット行動を起こすと考えられる。このように、同年代の身近な存在として、友人との関係や友人と自己の身体と比較が、瘦身願望に影響している可能性が高い。

【他人からの影響】 周囲からの影響

瘦身に関する社会的アプローチはメディアや友人だけでなく、日常の対人関係の中でも生じるはずである。例えば、平成 20 年国民健康・栄養調査では、自己の体型を「太っている」または「少し太っている」と回答した者についてその理由を尋ねたところ、20 歳代女性で最も多かった回答は、「他人と比べて」の 45.7% であった。これは、1976~2000 年の国民健康・栄養調査データを用いた解析で[44]、対象者の居住地の人口規模が大きいほど「痩せ」の割合が高かったという観察や、1998 年の国民健康・栄養調査データから理想体型を「痩せ」とする者の割合が、人口 100 万人以上の大都市で 49.8% と人口 5 万未満の地域の 36.5% に比べ高かったという観察と一致する。すなわち、より人口規模が大きく他者の体型と比較する機会の多い都市部では、自己の体型を太っていると評価をする者が多いと考えられる。また、Thompson, Heinberg, & Tantleff (1991) は、社会的場面で、自分の外見を他者と比較する傾向の個人差が身体イメージ不満足と関連することを明らかにしている[45]。つまり、日常生活で接触する他人との外見比較が瘦身願望の喚起にとって重要であると言える。守安(2011)は、瘦身願望に及ぼす影響として、メディアに登場する女性モデルの瘦身性と同等に日常生活で接触する他人との外見比較も十分に効果を持っていることを明らかにしている。また、興味深いことに女性モデルとの外見比較よりも同性の他人との外見比較の方が、瘦身理想像の内在化を促進することを示している[46]。

すなわち、友人だけでなく他人との身体比較（比較する機会が多いほど、他人を痩せていると認識することが多いほど）が瘦身願望、瘦身行動を強化していると言える。

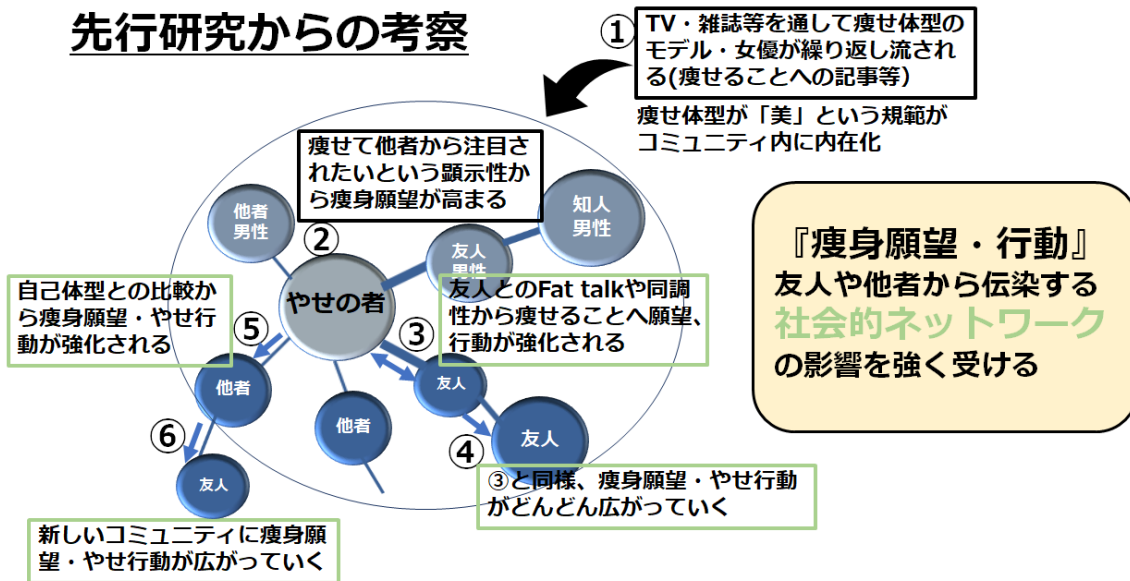
Ⅱ-Ⅳ 先行研究レビューのまとめ

先行研究から考えられることを【図2】にまとめた。

- ① メディアの影響：TV や雑誌等を通して痩せている体型のモデル・女優が繰り返し流されることにより、痩せ体型が「美」という規範が個人やコミュニティ内に内在化する。
- ② 個人の瘦身願望（損得意識）：痩せて自尊感情を高めたい、他者から賞賛されたい。または、太っていると他者から評価されて拒否されるのを回避したといった欲求から瘦身願望が高まり、瘦身行動を起こし「痩せ体型」になる。
- ③ 友人への影響：友人が痩せたのを認識、自分より痩せていると認識すると同調性や Fat talk などから身体不満が高まり、瘦身願望が喚起され、瘦身行動が起こり「痩せ体型」になる。
- ④ 友人の友人へ影響：③と同様の影響が友人の友人へと広がり、「痩せ体型」が広がっていく。
- ⑤ 他人への影響：痩せている人を見た他人が自己体型との比較から瘦身願望が喚起され、瘦身行動が起こり、「痩せ体型」になる。
- ⑥ 他人の友人への影響：⑤で痩せた友人を見て、同調性や Fat talk などから身体不満が高まり、瘦身願望が喚起され、瘦身行動が起こり「痩せ体型」になる。つまり、新しいコミュニティへと「痩せ体型」が広がっていく。

先行研究から考えられることは、①~⑥のように、「痩せ体型」が伝染して広がっているのではないかということである。つまり、瘦身願望・瘦身行動は友人や他人から伝染する社会的ネットワーク*2の影響を強く受けていると考えられる。

【図2】 先行研究レビューのまとめ 『先行研究からの考察』



II-V 本研究の仮説

若年女性の痩せは、自ら痩せることを選択して行動しているように思えるが、実は自らが形づくっているネットワーク内のコミュニティの規範（痩せ体型を良いとする考え方や行動）が伝染した結果が痩身願望の喚起や痩身行動につながっていると考えられる。つまり、若年女性の痩せは、『他人や友人から伝染する社会的ネットワークによる影響力が強く働いているのではないかと仮説を立てた。

【先行研究との相違点・新規性】

先行研究では、【図2】のそれぞれの番号単位での研究（主に女子大学生を対象）が多く、痩せの社会的ネットワークの影響力について明らかにした研究はみられない。本研究では、痩せの社会的ネットワークの影響力が個人の痩身願望・痩身行動にどのように関係しているかを調査し、検討する。また、ほとんどの先行研究では女子大生を対象にした研究であるため、経済的理由から食費への出費を抑制し、痩せている可能性もある。従って、本研究では、食費の出費（金銭を何に投資するか自由に決定できる経済的余裕）や人間関係の構築（大学生より幅広い選択肢から選んでいる可能性が高い）を自らの意思決定によってコントロールできる可能性の高い社会人（入社3～5年目）を対象として調査を行うこととした。

Ⅲ. 調査方法

Ⅲ-I 参考論文 肥満の社会的ネットワークの影響力

仮説の検証方法を計画していくうえで、肥満の社会的ネットワークの影響力を調査した Nicholas Christakis(2007) の論文を参考にした。この論文では、肥満は社会的ネットワークで「伝染」することが、長期の疫学調査から実証されている。また、太った人の姿を見たり、周囲に大食いの人がいたりすることで、食生活が容易に影響されることも実証されており、肥満がまるで伝染病のように、人から人へ伝播するというを示している[47]。

〈Nicholas Christakis(2007) 分析方法〉

Framingham Heart Study*³とよばれるコホート研究から、12,067人からなる大ネットワークのなかの5,124人に主要グループに焦点を合わせ、5万人を超える人の絆（被験者の家族だけでなく、友人や友人の友人まで可能な限りその被験者を取り巻くソーシャルネットワーク、隣人とのつながりは含めない）をデータマッピングにより可視化し【図3】、32年の間に人の絆（関わり）がどう変化したかを調べ、人々の体重、身長、その他の特性に関する既存情報に社会的ネットワークのデータを結びつけて解析している。

〈Nicholas Christakis(2007) 解析結果〉

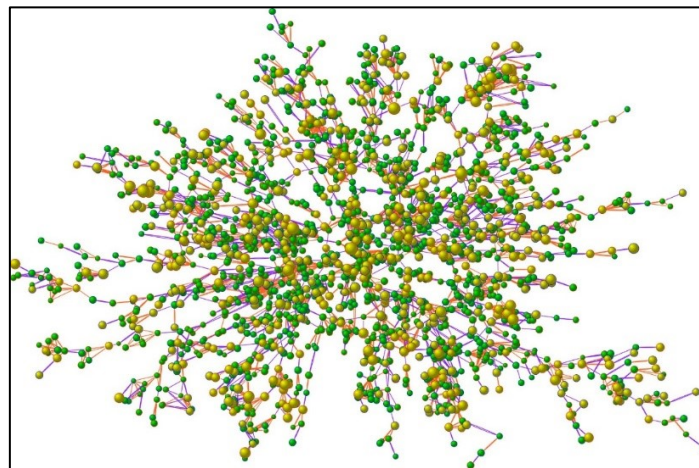
解析から明らかになった主な結果をまとめると以下の通りである。

1. 自分の友人が肥満になった場合、自分が肥満になる確率は57%増加する
(肥満の予測因子としては、肥満遺伝子の有無よりも、その人が持つネットワークのほうが、はるかに優れているということになる)
2. 大人の兄弟で、片方が肥満になった場合、もう片方が肥満になる確率は40%増加
3. 同性の兄弟の場合55%で、異性の兄弟の場合は27%で同性の方が影響が強い
4. 男兄弟では44%、女姉妹では67%と女性の方が影響が強い
5. 夫婦の場合、配偶者が肥満になった場合、自分が肥満になる確率は37%増加
6. 夫は44%、妻は37%

また、友人や家族との物理的な距離が離れていても影響を受けることや自分の友人の友人（自分は知らない）が肥満になった場合でも25%の影響を受け、友人の友人の友人が肥満になった場合でも10%の影響を受ける。特に異性間よりも同性間の方が影響を強く受ける傾向があることを示している。

つまり、この結果が示唆しているのは、単に行動を共にしたり、生活様式が同じだから肥満が伝染するのではなく、私達の意識しない部分で社会的ネットワークが強く機能して影響を及ぼしているということである。肥満の社会的ネットワークでは、太っていること、太ってしまうことを容認する考え方・行動がネットワーク内のコミュニティに伝播・構築されることによって肥満の伝染が広がっている。このメカニズムは本研究の仮説とも似ており、仮説を検証するうえで参考とした。

【図3】 Framingham Heart Study で調査対象となった 2200 人のネットワーク



節点の縁取りは性別(赤が女性、青が男性)、節点の色は肥満度(黄色は BMI30 以上、緑は 30 未満)を示し、節点の大きさは BMI に比例している。絆の色は関係の種類を示している(紫は友人か配偶者、オレンジは家族)。肥満者と非肥満者のクラスタリングはネットワークの特定の位置に見られる。

Ⅲ-Ⅱ アンケート調査 シルエット図選択法の活用

Nicholas Christakis の研究のように社会的ネットワークの影響力を調査するためには、追跡調査を行うのが因果関係を分析するうえで適している。しかし、日本人を対象とした Framingham Heart Study のようなデータセットを見つけることはできなかった。また、短期間の追跡調査を行っても人の関わりの変化（社会的ネットワークの影響）による「痩せ」の伝染は確認しにくいと考えられる。このようなことから、アンケート調査を行い「痩せ」と社会的ネットワークの関係性を調査、検証することとした。

痩せに関する先行研究や Nicholas Christakis の研究から「痩せ」の伝染に関わる要因として『模倣』と『認識』によってネットワーク内の規範が強化されることが重要であると考えられる。

『模倣』：痩せに関する先行研究からは、友人への同調性や自分の周りの同年代の仲間に体重、食事に対して関心が高い者が多いことが、ダイエット行動や瘦身願望を喚起していることを示している。また、肥満においても、周囲に大食いの人がいることで、なぜか同じように食べてしまうことが示されている。

『認識』：痩せに関する先行研究において、友人や他人を痩せていると認識することから瘦身願望が喚起されている。また、肥満においても友人などが太っていると認識することから考え方や行動の変化が生まれると示唆されている。

この2つに共通して言えることは、自己や他人の体型や行動を主観的に判断していることである。従って、この2つの要因を調査するために、アンケート調査においてシルエット図選択法^{*4}を用いることにした。シルエット図選択法により、現在の自分の体型、友人の体型、知人(友人の友人)、良く会う同性の体型、良く会う魅力的な異性の体型をどのように認識しているのか、その体型を模倣しようとしているのか(自分の理想体型と他人の体型が類似している)を調査し、他人の体型が自己の理想体型にどのように影響しているかを調査し、「痩せ」と社会的ネットワークの関係性を検証する。

Ⅲ-Ⅲ 調査参加者と調査手続き

関東圏（東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城、栃木、群馬、山梨）を勤務地とする小売業に勤める入社3~5年目の20歳代の正社員を無作為抽出し、パソコンメールにてアンケート調査への協力を依頼した。調査への協力は強制ではなく任意であること、人事評価等には一切関係なく、協力しないことによる不利益は何ら存在しないこと、無記名のため個人が特定されることはないことをアンケート調査依頼文、アンケート用紙の冒頭記載にて説明書きをした。アンケート調査依頼者は全体で1,265人（うち男性593人、女性672人）。アンケート回答方法は、メールにて送付したアンケート質問用紙を印刷してボールペンで回答するように説明した。アンケート回収方法は、アンケート用紙を郵送で送付するように依頼した。

調査期間

2018年11月21日~11月30日。11月21日にアンケート依頼文と調査用紙をメールにて調査対象者に送付し、回答用紙を郵送回収した。

質問紙の構成

質問紙は、回答者の基本属性の設問に加え①自己身体認識とその理由 ②瘦身願望尺度（馬場・菅原(2000)が作成したもの） ③ダイエット経験 ④経済的合理性・非合理性の考え方⑤メディアからの影響 ⑥主観的体型認識（シルエット図選択法） ⑦身長・体重に関する設問から構成されている。

1-1)身体認識

今の自分の体型をどのように考えていますか。「1. 太り過ぎ」「2. やや太り過ぎ」「3. 普通」「4. 痩せ気味」「5. 痩せ過ぎ」の5件法で回答を求めた。この回答は、現在体型との関連が認められると想定される。

1-2)身体認識の理由

今の自分の体型をどのように考えていますか。なぜそのような考えたのか理由を尋ねた。回答選択肢「1. 過去の自分と比べて」「2. 友人と比べて」「3. 他人と比べて」「4. 血縁関係の人と比べて」「5. 血縁関係の人に直接、言われた」「6. 友人に直接、言われた」「7. パートナーから直接、言われた」「8. 友人や血縁関係、パートナー以外の人から直接、言われた」「9. 標準体重や標準BMIから判断」「10. 健康診断や医療機関で指摘された」「11. その他」11の選択肢の中から最もあてはまるもの1つの回答を求めた。

2) 瘦身願望尺度

回答者が抱いている瘦身願望の程度を測定するために、馬場・菅原(2000)が作成した 11 項目からなる瘦身願望尺度を利用した。彼らは、女子大生・短大生を対象として、この尺度の 1 次元性を確認した[23]。6 ヶ月間の回答者の状態を思い浮かべさせ、自分の体や「痩せる」ことについてどのように考えがちであったかを思い出させ、11 項目の質問について、回答者自身の考えや態度にあてはまる程度を 4 点尺度で回答を求めた。(「4. かなりあてはまる」「3. あてはまる」「2. あてはまらない」「1. ほとんどあてはまらない」)

- (1). 体重が増えるのが怖い。(2). もっと痩せたいという思いで頭がいっぱいだ。
- (3). 体重にとらわれている。(4). 何が何でも体重を減らしたい。
- (5). もっと痩せていたらと悔やむことが多い。(6). 体力が落ちてもとにかく痩せたい。
- (7). 少しでも早く痩せたい。(8). 痩せられると聞けば何でもする。
- (9). 自分が痩せることを考えるとわくわくする。
- (10). 体重を量ったときに減っていると嬉しい。(11). 今、痩せることに一番興味がある

瘦身願望尺度得点の高いものほどダイエット経験が豊富であり、過激なダイエットにも挑み、また日常的にも摂食量を控える傾向にあることが確認されている[23]。

3) ダイエット経験

ダイエットをしたことがあるか、その経験頻度について「常にしている」「3 回以上ある」「1、2 回ある」「ない」の 4 件法で回答を求めた。

4) 経済的合理性・非合理性の考え方(将来の健康リスク)

肥満による将来の健康リスクについて考えるか、「よく考える」「たまに考える」「あまり考えない」「まったく考えない」の 4 件法で回答を求めた。

痩せ過ぎによる将来の健康リスクについて考えるか、「よく考える」「たまに考える」「あまり考えない」「まったく考えない」の 4 件法で回答を求めた。

5) メディアからの影響

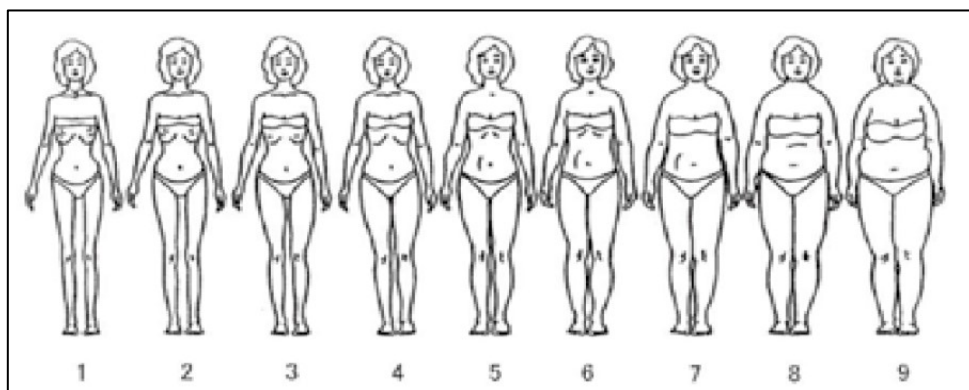
平日 1 日にどのくらい健康や美容、ファッションに関するテレビや雑誌(通販を含む)をみるか、その視聴時間について「まったく見ない」「~1 時間」「~2 時間」「~3 時間」「~4 時間」「~5 時間」「~6 時間」「6 時間以上」からあてはまるものの回答を求めた。

6) 主観的体型認識(シルエット図選択法)

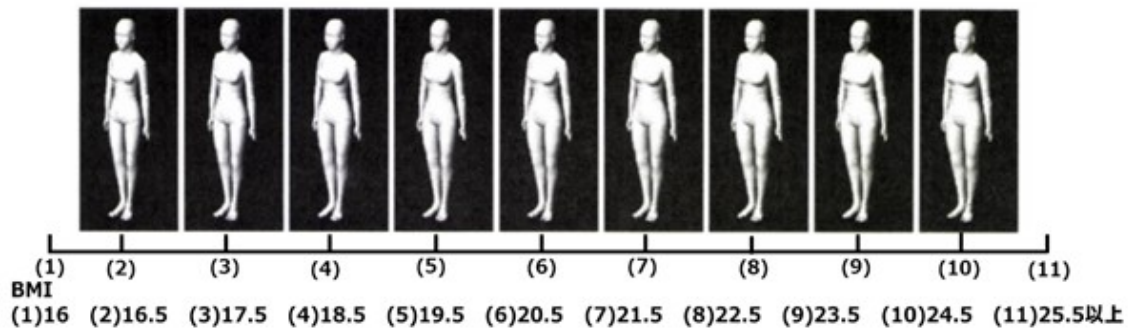
体型を評価するには、広く BMI が用いられており、この値で「痩せ」、「標準」、「肥満」の区分を与えることが行われているが、BMI は身長と体重の測定値から算出される客観的

な体型評価であって、個々人がどのように自身の体型を意識・評価しているかの主観的指標ではない。主観的な体型意識を捉える調査法として、シルエット図選択法（以下、シルエット体系）を用いることが行われており、肥満症状の評価・改善指導には Stnkard AJ ら[48]の BMI 18.3 から 45.4 を 9 段階としたシルエット体系の利用例が多く見受けられるが、標準体型を中心とした調査対象には、より標準体型範囲を充実させた Thompson MA ら[49]の 9 段階のシルエット体系【図 4】（BMI 対応は未完了、以下、Thompson シルエット系）が用いられている。鈴木(2007)は、多数の体型測定値データを用いて日本人女性の BMI で 16~24 の範囲のマネキンモデル(J-BSS-1)をコンピューターソフトにより算出描画し[50]【図 5】、これを用いて日本人一般女性の体型意識検討[51]を行い、自己体型意識が現実体型から高 BMI 側に偏移していること示している。しかし、J-BSS-1 は、実際の BMI に沿った均等な間隔でのモデルの提示で、最肥満側の BMI が 24 までであるため、標準範囲後半の BMI を持つ日本人女性にとっては、各自の主観に適合したモデルが見当たらず、自己体型意識の測定を歪めている可能性がある。Thompson シルエット系は、この点で人間の体型評価の特性（BMI が高い領域では、より大きな違いが必要となる）に沿った構成となっていると見られる。續ら[52]によっても Thompson 体系【図 4】は、BMI 換算で 16 強から 24 弱の範囲の値を持つ標準的な女子大学生に対し自己体型認識および理想体型の有用な主観的体型指標として利用できることが確認されている。本研究での調査対象者も 20 歳代の男女であり、標準体型者が大多数を占めると考えたため Thompson シルエット体系を用いて、調査対象者の主観的、あるいは視覚印象に基づく体型意識を把握することを試みた。

【図 4】 Thompson&Gray による女性のシルエット図



【図5】 J-BSS-1 シルエット図 鈴木公啓作成



(社)人間生活工学研究センターが所有する約3万4千任のデータを基とし、コンピューター・マネキンシステム「quete」にてシルエット図を作成。

自己体型・自己の理想体型：Thompson シルエット体系（男性用、女性用）から、現状の自己体型に相当するもの、および各自が理想とする最も近いと判断されるものの番号での回答を求めた。

他者からの体型認識に及ぼす影響を調査するために以下項目を尋ねた

同性の親しい友人2名の体型：Thompson シルエット体系から同性の親しい友人2名の体型に相当する最も近いと判断されるものの番号での回答を求めた。

同性の知人（友人の友人、調査対象者と知人は友人関係でない人を想定）2名の体型：Thompson シルエット体系から同性の知人2名の体型に相当する最も近いと判断されるものの番号での回答を求めた。

良く会う同性(友人や血縁関係以外の人)1名の体型：Thompson シルエット体系から良く会う同性1名の体型に相当する最も近いと判断されるものの番号での回答を求めた。

良く会う魅力的だと思う異性(血縁関係以外の人)1名の体型：Thompson シルエット体系から良く会う魅力的だと思う異性1名の体型に相当する最も近いと判断されるものの番号での回答を求めた。

7)身長・体重

客観的データである BMI を算出するために身長・体重、理想体重尋ねた。身長は、cm 単位での回答を求めた。体重と理想体重は、Kg 単位での回答を求めた。

IV. 結果

1,265人(うち男性593人,女性672人)にアンケートを依頼し、調査期間中に154人(男性60人、女性94人)から回答を得た。このうち、身長・体重の記載が得られなかった男性1名と女性4名を除外したため、解析対象者は149人(男性59人、女性90人)有効回答率11.8%であった。女性が多いサンプルである。

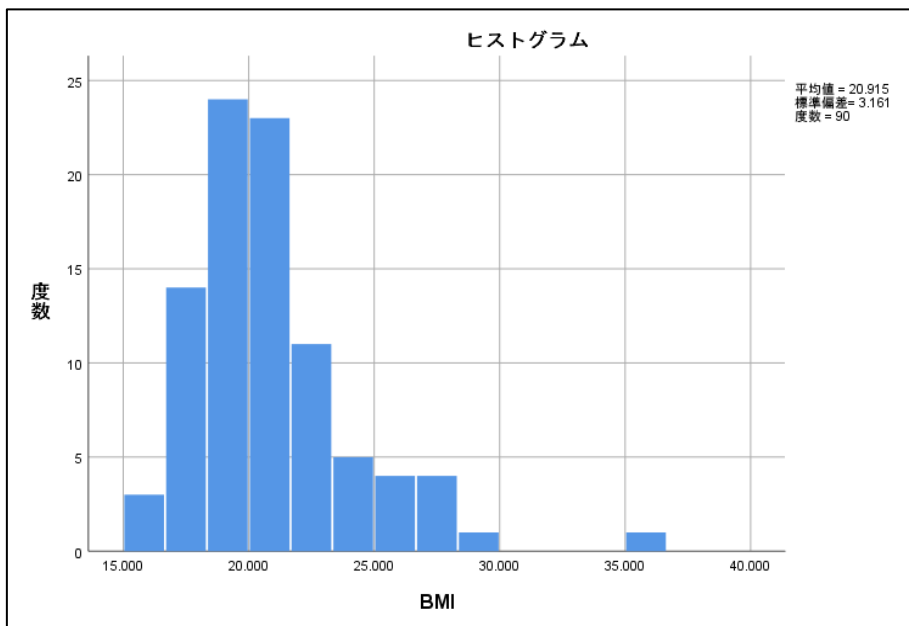
【アンケート回答者の個人属性】

回答者の個人属性を【表2】に示す。女性回答者の平均身長は158.3cm(標準偏差±5.2)、平均体重は52.5kg(標準偏差±9.0)、平均BMIは20.9(標準偏差±3.2)であり、男性回答者の平均身長は172.7cm(標準偏差±5.3)、平均体重は66.7kg(標準偏差±11.5)、平均BMIは22.3(標準偏差±3.6)であった。厚生労働省の「平成28年国民健康・栄養調査」によると、20歳代の女性の平均身長は158.1cm(標準偏差±5.7)、平均体重は52.3kg(標準偏差±8.8)、男性の平均身長は171.5cm(標準偏差±5.9)、平均体重は67.6kg(標準偏差±12.5)であるため、本研究の対象者の身長・体重の平均値は、日本全国の20歳代の平均値と同じような値を示しているといえる。回答者のBMI分布を女性は【図6】、男性は【図7】に示す。女性回答者のBMI18.5未満(痩せ体型)は20人(22.2%)、BMI18.5~25(普通体型)は60人(66.7%)、BMI25以上(肥満体型)は10人(11.1%)であり、男性回答者のBMI18.5未満(痩せ体型)は2人(3.4%)、BMI18.5~25(普通体型)は46人(78.0%)、BMI25以上(肥満体型)は11人(18.6%)であった。厚生労働省の「平成28年国民健康・栄養調査」によると、20歳代の女性のBMI18.5未満は20.8%、BMI18.5~25は70.3%、BMI25以上は8.9%、男性のBMI18.5未満は8.6%、BMI18.5~25は66.8%、BMI25以上は24.6%である。本研究の対象者が日本の20歳代のBMI分布を表しているのか、カイ2乗検定により実測度数が国民健康・栄養調査から得られた期待度数に近いか適合度の検定を行った。有意水準=0.05と設定する。女性のカイ2乗検定の結果を【表3】に示す。 $\chi^2=0.736$ 、 $df=2$ 、 $p=0.692 > 有意水準=0.05$ 従って、本研究の女性回答者は日本のBMI分布を表しているといえる。男性のカイ2乗検定の結果を【表4】に示す。 $\chi^2=3.826$ 、 $df=2$ 、 $p=0.148 > 有意水準\alpha=0.05$ 従って、本研究の男性回答者は日本のBMI分布を表しているといえる。女性回答者の75.6%、男性回答者の72.9%が一人暮らしであった。居住地は南関東が多く(89.9%)、人口の多い都県の回答者に偏ったサンプルであるといえる。

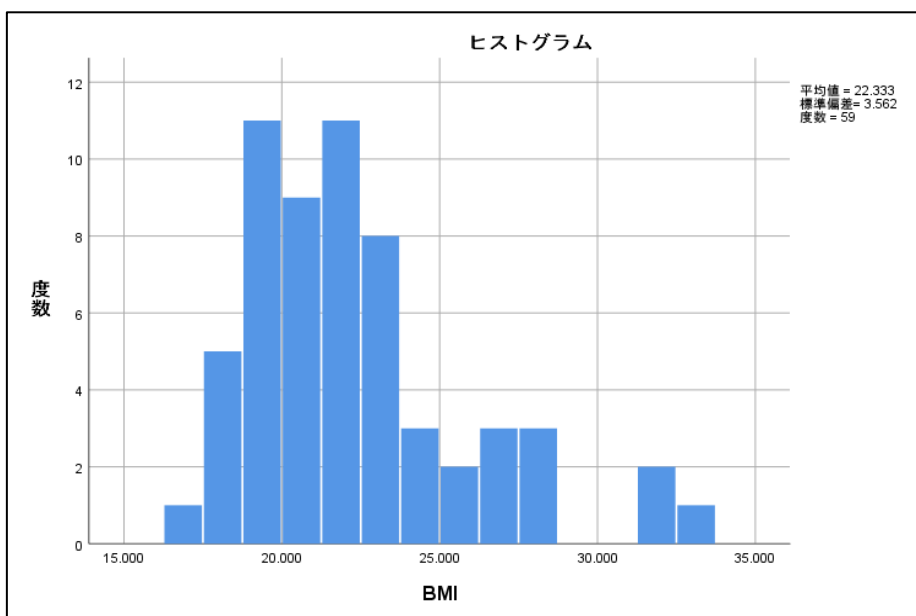
【表2】 分析対象となるアンケート回答者の特徴

対象者数	149人	
特徴（個人属性）		
性別	女性：90人（60.4%）	男性：59人（39.6%）
同居人	なし：68人（75.6%） あり：22人（24.4%）	なし：43人（72.9%） あり：16人（27.1%）
身長	平均値：158.3cm（標準偏差：±5.2） 最小値：148cm 最大値：172cm	平均値：172.7cm（標準偏差：±5.3） 最小値：159cm 最大値：186cm
体重	平均値：52.5kg（標準偏差：±9.0） 最小値：38kg 最大値：90kg	平均値：66.7kg（標準偏差：±11.5） 最小値：48kg 最大値：101kg
BMI	平均値：20.9（標準偏差：±3.2） 最小値：15.6 最大値：35.2	平均値：22.3（標準偏差：±3.6） 最小値：17.4 最大値：32.7
BMI分布	18.5未満：20人（22.2%） 18.5~25：60人（66.7%） 25以上：10人（11.1%）	18.5未満：2人（3.4%） 18.5~25：46人（78.0%） 25以上：11人（18.6%）
居住地	東京都： 30人（20.1%） 神奈川県：26人（17.4%） 千葉県： 39人（26.2%） 埼玉県： 39人（26.2%） 群馬県： 3人（2.0%） 栃木県： 4人（2.7%） 茨城県： 8人（5.4%） 山梨県： 0人	

【図6】 〈女性〉 調査対象者の BMI 分布



【図7】 〈男性〉 調査対象者の BMI 分布



【表 3】 分析対象者（女性）BMI 分布と平成 28 年国民健康・栄養調査の BMI 分布の有意差検定

女性体型区分

	観測度数	期待度数	残差
痩せ体型	20	18.7	1.3
普通体型	60	63.3	-3.3
肥満体型	10	8.0	2.0
合計	90		

検定統計量

	女性体型区分
カイ2乗	.736a
自由度	2
漸近有意確率	0.692

a. 0 セル (.0%) の期待度数は 5 以下です。必要なセルの度数の最小値は 8.0 です。

【表 4】 分析対象者（男性）BMI 分布と平成 28 年国民健康・栄養調査の BMI 分布の有意差検定

男性体型区分

	観測度数	期待度数	残差
痩せ体型	2	5.1	-3.1
普通体型	46	39.4	6.6
肥満体型	11	14.5	-3.5
合計	59		

検定統計量

	男性体型区分
カイ2乗	3.826a
自由度	2
漸近有意確率	0.148

a. 0 セル (0.0%) の期待度数は 5 以下です。必要なセルの度数の最小値は 5.1 です。

【BMI3 区分(痩せ体型、普通体型、肥満体型)の自己体型、理想体型のシルエット番号】

理想シルエット体型番号と自己体型シルエット体型図の差を「希望シルエット変位」として、以後の分析に用いた。BMI3 区分の自己体型シルエット番号、理想体型シルエット番号、希望シルエット変位の平均値を【表 5】に示す。女性回答者の痩せ体型者は、自己体型番号平均値が 3.5、理想体型番号平均値が 3.4 である。痩せ体型であるが、まだ痩せようとしている傾向がみられる。一方、男性回答者の痩せ体型者は、自己体型番号平均値が 4.5、理想体型番号平均値が 5.5 であり、痩せ体型から普通体型になることを望む傾向がみられる。女性回答者の普通体型者は、自己体型番号平均値が 5.5、理想体型番号平均値が 3.8 である。普通体型であるが、痩せ体型になることを望む傾向がみられる。一方、男性回答者の普通体型者は、自己体型番号平均値が 5.2、理想体型番号平均値が 5.2 であり、現状の普通体型を維持することを望む傾向がみられる。肥満体型者は、男女ともに痩せることを望んでおり、女性は、男性より理想体型を痩せ体型に設定する傾向がみられる。男女合わせた希望シルエット変位は次の通りである。痩せ体型の希望シルエット変位の平均値：0、普通体型の希望シルエット変位の平均値：-1.7、肥満体型の希望シルエット体型の平均値：-3。

【表 5】 BMI3 区分(痩せ体型、普通体型、肥満体型)の自己体型・理想体型シルエット図の平均値

	自己体型番号	理想体型番号	希望シルエット変位	
痩せ体型	女性	3.5 (標準偏差±1.2)	3.4 (標準偏差±0.9)	-0.1 (標準偏差±1.4)
	男性	4.5 (標準偏差±0.5)	5.5 (標準偏差±0.5)	1 (標準偏差±0)
普通体型	女性	5.5 (標準偏差±1.3)	3.8 (標準偏差±1.0)	-1.8 (標準偏差±1.1)
	男性	5.2 (標準偏差±1.3)	5.2 (標準偏差±1.1)	0.0 (標準偏差±1.6)
肥満体型	女性	7.5 (標準偏差±1.2)	3.8 (標準偏差±1.1)	-3.7 (標準偏差±1.1)
	男性	8.0 (標準偏差±1.1)	5.6 (標準偏差±1.6)	-2.4 (標準偏差±0.9)

* 希望シルエット変位 = 理想体型番号 - 自己体型番号

【痩身願望尺度の設定】

本研究では、自分や他人の体型認識を主観的観点（シルエット体系）によって、社会的ネットワークの影響力を調査するため、先行研究でよく用いられている痩身願望尺度（馬場・菅原）を分析に用いるのではなく、希望シルエット変位を痩身願望の尺度として分析に用いる。

痩せ体型と普通体型における痩身願望尺度を下記のように設定する。

「痩せ体型」：痩せ体型であるのに、まだ痩せようとする。

希望シルエット変位 < 0 を痩身願望が高いとして分析を行う。

また、男性の痩せ体型は 2 人と少ないため女性のみの分析を行う。

「普通体型」：普通体型の希望シルエット変位平均値は -1.7 である。

よって平均値より低い値は痩身願望が高い。

希望シルエット変位 ≤ -2 を痩身願望が高いとして分析を行う。

「肥満体型」：肥満体型においては、痩せることによって健康体型になる可能性が高いため、本研究では分析の対象外とした。

【痩身願望とダイエット経験の関係】

痩身願望が高い者と低い者でダイエット経験に有意差があるかカイ 2 乗検定を行った。痩せ体型のカイ 2 乗検定の結果を【表 6】に示す。 $\chi^2=7.013$ 、 $df=1$ 、 $p=0.014 < 有意水準=0.05$ 従って、痩身願望が高い人と低い人でダイエット経験に差があるといえる。

普通体型のカイ 2 乗検定の結果を【表 7】に示す。 $\chi^2=7.982$ 、 $df=1$ 、 $p=0.006 < 有意水準$

=0.05 従って、普通体型においても痩身願望が高い人と低い人でダイエット経験に差があるといえる。つまり、痩身願望が高い人はダイエット経験が豊富であることを示している。この結果は、先行研究（馬場・菅原の痩身願望尺度を用いた研究）でも同様の結果を示している[23]。この結果から、希望シルエット変位を痩身願望尺度として用いても、痩身願望や痩身行動への影響を検証することができるといえる。

【表6】 痩せ体型 痩身願望とダイエット経験の関係 カイ2乗検定

クロス表

		痩身願望		合計
		低い	高い	
ダイエット経験3回以上	ない	9	5	14
	ある	0	6	6
合計		9	11	20

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意 確率 (両側)	正確な有意 確率 (両側)	正確有意 確率 (片側)	点有意確率
Pearson のカイ2乗	7.013a	1	0.008	0.014	0.012	
連続修正b	4.656	1	0.031			
尤度比	9.276	1	0.002	0.014	0.012	
Fisher の直接法				0.014	0.012	
線型と線型による連関	6.662c	1	0.010	0.014	0.012	0.012
有効なケースの数	20					

a. 2セル (50.0%) は期待度数が5未満。最小期待度数は2.70。

b. 2x2表に対してのみ計算

c. 標準化統計量は2.581。

【表7】 普通体型 痩身願望とダイエット経験の関係 カイ2乗検定

クロス表

		痩身願望		合計
		低い	高い	
ダイエット経験3回以上	ない	50	23	73
	ある	13	20	33
合計		63	43	106

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意 確率 (両側)	正確な有意 確率 (両側)	正確有意 確率 (片側)
Pearson のカイ2乗	7.982a	1	0.005		
連続修正b	6.820	1	0.009		
尤度比	7.927	1	0.005		
Fisher の直接法				0.006	0.005
線型と線型による連関	7.906	1	0.005		
有効なケースの数	106				

a. 0セル (.0%) は期待度数が5未満。最小期待度数は13.39。

b. 2x2表に対してのみ計算

【普通体型の者の瘦身願望を高める要因】

普通体型の者が友人や知人、良く会う同性、良く会う魅力的な異性の体型を痩せていると認識していると、瘦身願望が高いかどうかをロジステック回帰分析（多変量解析）にて検証した。その結果を【表8】に示す。目的変数、説明変数は以下の通りである。

目的変数 Y：瘦身願望が高い=1、瘦身願望が低い=0。

説明変数 X1：女性=1、男性=0、X2：友人2人のうちどちらかが自分より痩せている=1、友人2人とも自分より痩せていない=0、X3：知人2人うちどちらかが自分より痩せている=1、知人2人とも自分より痩せていない=0、X4：良く会う同性が自分より痩せている=1、良く会う同性が自分より痩せていない=0、X5：良く会う魅力的な異性が自分より痩せている=1、良く会う魅力的な異性が自分より痩せていない=0

X1:オッズ比 5.159(p=0.020)、X2:オッズ比 12.52(p=0.031)、X3:オッズ比 1.471(p=0.600)、X4:オッズ比 4.087(p=0.032)、X5:オッズ比 6.901(p=0.008)、モデル p =0.000、Nagelkerke R2乗：0.602。「女性」、「友人2人のうちどちらかが自分より痩せている」、「良く会う同性が自分より痩せている」、「良く会う魅力的な異性が自分より痩せている」の説明変数が有意であった。従って、普通体型の女性は、友人2人のうちどちらかが自分より痩せている、良く会う同性が自分より痩せている、良く会う魅力的な異性が自分より痩せていると認識すると、瘦身願望が高い傾向にある。

【表8】 普通体型 社会的ネットワークの影響 多変量ロジステック回帰分析

多変量解析の結果	偏回帰係数	p値	オッズ比	Nagelkerke R2乗	的中率
X1,女性	1.641	0.020	5.159	0.602	82.2
X2,友人のどちらかが痩せている	2.527	0.031	12.52		
X3,知人のどちらかが痩せている	0.386	0.600	1.471		
X4,良く会う同性が痩せている	1.408	0.032	4.087		
X5,良く会う魅力的な異性が痩せている	1.932	0.008	6.901		
モデル		0.000			

【痩せ体型の人が太ろうとする要因】

痩せ体型の人が太ろうとする要因をロジステック回帰分析（単変量解析）にて検証した。

結果を【表9】に示す。目的変数、説明変数は以下の通りである。

目的変数 Y：希望シルエット変位 > 0 = 1、希望シルエット変位 ≤ 0 = 0。

説明変数 X1：友人2人のうち1人以上自分より太っている = 1、友人2人とも自分より太っていない = 0、X2：友人2人ともが自分より太っている = 1、友人2人ともが自分より太っていない = 0、X3：知人2人のうち1人以上自分より太っている = 1、知人2人とも自分より太っていない = 0、X4：知人2人ともが自分より太っている = 1、知人2人ともが自分より太っていない = 0、X5：良く会う同性が自分より太っている = 1、良く会う同性が自分より太っていない = 0、X6：良く会う魅力的な異性が自分より太っている = 1、良く会う魅力的な異性が自分より太っていない = 0、X7：TV・雑誌の視聴時間なし = 1、TV・雑誌の視聴時間あり = 0、X8：痩せ過ぎによる将来の健康リスクを考える = 1、痩せ過ぎによる将来の健康リスクを考えない = 0。

X2：オッズ比 60 ((p=0.007)、「友人2人ともが太っている」のみが有意であった。従って、痩せ体型の女性は、友人2人ともが太っていると認識すると現在の体型より太ろうとする傾向にある。

【表9】 痩せ体型 太ろうとする要因 単変量ロジステック回帰分析

単変量解析の結果	偏回帰係数	p 値	オッズ比	Nagelkerke R2乗	的中率
X1,友人のどちらかが太っている	20.915	0.999	1.212E+09	0.300	68.4
X2,友人2人ともが太っている	4.094	0.007	60.00	0.627	89.5
X3,知人のどちらかが太っている	0.405	0.765	1.500	0.010	69.2
X4,知人2人ともが太っている	22.707	0.999	7.27E+09	0.495	84.6
X5,良く会う同性が太っている	1.897	0.120	6.667	0.197	70.0
X6,良く会う魅力的な異性が太っている	1.322	0.279	3.750	0.094	70.0
X7,視聴時間なし	-0.31	0.808	0.733	0.004	70.0
X8,将来の痩せ過ぎによる健康リスクを考える	1.897	0.120	6.667	0.197	70.0

V. 考察

痩せの社会的ネットワークの影響や関係性については、既存研究では、他人志向性と瘦身願望について定量的に把握されてきた[39, 46, 53]。しかし、社会的ネットワーク内でつながっている他人の体型が、瘦身願望に影響しているかは、これまで明らかにされていなかった。そこで本研究では、シルエット選択法により、アンケート回答者が構築している社会的ネットワーク内の友人や知人、良く会う同性、魅力的な異性、自己の体型認識を定量化し、そのデータを基にロジステック回帰分析により、痩せと社会的ネットワークの関係性を定量的に把握した。

シルエット選択法によって得られた理想体型の結果より、女性は痩せ体型や普通体型であっても、さらに痩せることを望む傾向にあり、男性は痩せ体型や普通体型であればそれ以上痩せることを望まない傾向にあった【表 5】。このような傾向は多くの先行研究でも指摘されている。本研究では、このような女性特有の瘦身志向の背景には、社会的ネットワークの力が関係していると考え、分析を行った【表 8】。その結果、普通体型の女性では、友人が自分より痩せていたり、良く会う同性や良く会う魅力的な異性が自分より痩せていると瘦身願望が高いことがわかった。つまり、普通体型の女性においては、友人や日常的に良く会う人の体型と瘦身願望に相関関係があるといえる。周囲にどのような体型の人がいるか、どのような体型の人とネットワークを作るかによって、瘦身願望や自己の体型に影響を及ぼしている可能性が考えられる。このように考えると、痩せも肥満と同じように社会的ネットワークの影響を受けているともいえる。つまり、自ら痩せることを選択しているようにみえるが、周囲に痩せている人がいることにより、無意識のうちに社会的ネットワークの影響を受けて、痩せることを望み、痩せる行動を強化する規範が伝染して、痩せた体型を理想体型とせざる得なくなり、瘦身願望が高まっているという見方もできる。

社会的ネットワークの関係性は、女性の痩せ体型者が、太ろうとする要因分析結果においても確認できた。友人や知人、良く会う同性、良く会う魅力的な異性が自分より太っている、メディアの影響（TV・雑誌の視聴時間ゼロ）、痩せ過ぎによる将来の健康リスクを考えている痩せ体型の女性は、太ろうとしているかどうかロジステック回帰分析（単変量解析）を行った【表 9】。その結果、友人 2 人ともが太っている説明変数のみが有意な値を示した。この結果から、痩せていることが「美」である社会文化的背景においても、友人 2 人が自分より太っていれば太ろうとする傾向が高いことがわかる。また、メディアの影響や個人的要因

(経済合理的な考え)より友人2人が太っていることによる相関が強いことがわかる。つまり、痩せ体型を改善させるためには、個人的要因やメディア(外的要因)より、親密度の高い社会的ネットワークの影響の方が受け入れられ易いと考えられる。しかし、本研究では、痩せようと思っている痩身願望の高い人が、意識的に痩せている人と一緒にいるケースや、痩せている人が太ろうと思ひ、意識的に自分より太っている人と一緒にいるケースなどは排除できていない。痩身願望に社会的ネットワークが影響を及ぼしているという因果関係については特定できない。だが、上記ケースにおいても、痩せている人は周囲の人を痩せの方向に向かわせるし、肥満者は周囲の人を太る方向に向かわせるという結果は同じである。従って、本研究で得られた結果から社会的ネットワークの力によって痩身願望や痩身行動を促進させることや、逆に抑制させることも可能であることが確認できた。

本研究の問題としては、第1にアンケート調査回答者が南関東圏に集中していること、また男性の痩せ体型のサンプル数が十分でなかったため、痩せ体型における性別比較ができなかった点である。人口の多い都市部に住む人は、人口の少ない街に住む人より、痩身願望が高いことが先行研究において指摘されていたため[44]、女性の痩せ体型者のサンプル数を多く集めるために、アンケート依頼を南関東圏の女性に偏って調査設計を行ってしまった。日本全体を対象とした研究を行うためには、アンケート依頼の居住地・性別のサンプル抽出のバランスを整える必要がある。第2にアンケート回収率が低かったことである。メールで送付したアンケート用紙を印刷して回答し、郵送で回収する方法に問題があったと考えられる。現在、20歳代の多く人はスマートフォンやインターネットを利用しており、そのような機器を用いて空き時間に手軽に操作できる環境に慣れている。現在、多くのアンケート調査は、スマートフォンなどで手軽にアンケートが行える環境を整えて調査を実施している。従って、そのような環境に慣れたアンケート回答者に対して、時代に逆行するような手法でのアンケート回答・回収方法であったため、アンケート回答・提出が煩わしく思え、アンケート回答・提出しなかったと考えられる。回収率を上げるためだけでなく、データ整理・分析を行う上でもデジタル環境を整えてアンケート調査を実施すべきであった。

V-I 本研究の限界

Nicholas Christakis(2007) の肥満の社会的ネットワークの影響については、追跡調査を行い、友人や知人の体型が変わることによって自己の体型変化「肥満の伝染」を映画のようにダイナミックに調査できている。肥満がネットワークを経て伝染していることを示している。しかし、本研究で行った調査方法は1度限りのアンケート調査である。スナップショットで自己体型と友人や知人体型をみているため、友人や知人が痩せているため痩身願望が高まったのか、もともとの痩身願望が高いから痩せている人と一緒にいるのか因果関係が明確ではない。痩せの社会的ネットワークの影響を明確に調査するためには、追跡調査を行い、友人や知人などの体型変化による自己体型の変化の観察が必要である。また、アンケート調査では、自分が意識して思いだせる、比較的接する機会が多い人の体型でしか相関性が測定できない。Nicholas Christakis 肥満の研究では 友人の友人の友人（3次の隔たり）まで影響を受けることを示していたが、本研究では友人の友人（2次の隔たり）と痩身願望の相関性は確認できなかった。このことも、アンケート調査の限界であると考えられる。アンケート調査では、自らが意識していない部分の人間関係（会ったことがない人、体型などを思い出せない人）については、回答することすらできない。

VI. 結論

本研究から、普通体型の女性は、友人や良く会う同性、良く会う魅力的な異性が痩せていたら痩身願望が高い傾向にあること。痩せ体型の女性は、友人2人ともが自分より太っていると現在の体型より太ろうとする傾向にあることがわかった。本研究からは社会的ネットワークの影響により、痩身願望が変化する過程を確認することはできないが、社会的ネットワークの力によって痩身願望を促進させることや抑制させることが可能であることを確認することができた。また、女性の痩せ体型をビジネスとして解決させるためには、個人的アプローチやメディア（外的要因）のアプローチより、親密度の高い社会的ネットワークを活用することが重要であることが示唆された。

参考文献

1. 厚生労働省 平成 28 年度国民医療費.
2. 平成 27 年版厚生労働白書 序章第 1 節人口減少の見通し.
3. 総務省「国勢調査」及び「人口推計」, 国立社会保障・人口問題研究所「日本の 将来推計人口 (平成 24 年 1 月推計):出生中位・死亡中位推計」(各年 10 月 1 日現在人口), 厚生労働省「人口動態統計」
4. 経済財政運営と改革の基本方針 2015.
5. 平成 28 年国民健康・栄養調査.
6. Sugawara, A., et al., *Thinness in Japanese young women*. 2009. **20**(3): p. 464-465.
7. Viner, R., et al., *Body mass, weight control behaviours, weight perception and emotional well being in a multiethnic sample of early adolescents*. 2006. **30**(10): p. 1514.
8. Ozmen, D., et al., *The association of self-esteem, depression and body satisfaction with obesity among Turkish adolescents*. 2007. **7**(1): p. 80.
9. Ter Bogt, T.F., et al., *Body mass index and body weight perception as risk factors for internalizing and externalizing problem behavior among adolescents*. 2006. **39**(1): p. 27-34.
10. Keel, P.K., et al., *A 20-year longitudinal study of body weight, dieting, and eating disorder symptoms*. 2007. **116**(2): p. 422.
11. Neumark-Sztainer, D., et al., *Why does dieting predict weight gain in adolescents? Findings from project EAT-II: a 5-year longitudinal study*. 2007. **107**(3): p. 448-455.
12. Field, A.E., et al., *Relation between dieting and weight change among preadolescents and adolescents*. 2003. **112**(4): p. 900-906.
13. Russell, J.D., et al., *Protein repletion and treatment in anorexia nervosa*. 1994. **59**(1): p. 98-102.
14. Selzer, R., et al., *The association between secondary amenorrhea and common eating disordered weight control practices in an adolescent population*. 1996. **19**(1): p. 56-61.
15. Turner, J., et al., *Predictors of low bone density in young adolescent females with anorexia*

- nervosa and other dieting disorders*. 2001. **30**(3): p. 245-251.
16. Korpelainen, R., et al., *Lifestyle factors are associated with osteoporosis in lean women but not in normal and overweight women: a population-based cohort study of 1222 women*. 2003. **14**(1): p. 34-43.
 17. Flegal, K.M., et al., *Cause-specific excess deaths associated with underweight, overweight, and obesity*. 2007. **298**(17): p. 2028-2037.
 18. Flegal, K.M., et al., *Excess deaths associated with underweight, overweight, and obesity*. 2005. **293**(15): p. 1861-1867.
 19. Murakami, M., et al., *Prepregnancy body mass index as an important predictor of perinatal outcomes in Japanese*. 2005. **271**(4): p. 311-315.
 20. Jokela, M., et al., *Body mass index in adolescence and number of children in adulthood*. 2007: p. 599-606.
 21. Godfrey, K.M. and D.J.J.P.h.n. Barker, *Fetal programming and adult health*. 2001. **4**(2b): p. 611-624.
 22. . p. https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/pdf/woman_shien_15.pdf.
 23. 馬場安希 and 菅.J. 教育心理学研究, 女子青年における痩身願望についての研究. 2000. **48**(3): p. 267-274.
 24. 病院, 後.J., *行動経済学からみた予防医療*. 2015. **74**(6): p. 410-414.
 25. Garner, D.M. and P.E.J.P.m. Garfinkel, *Socio-cultural factors in the development of anorexia nervosa*. 1980. **10**(4): p. 647-656.
 26. 秋本雅代 and 諸.J. 出版ニュース, 女性雑誌の「痩せたい広告」の現在—痩身・整形広告の内容と問題点. 1987: p. 8-11.
 27. 心身医学, 山.J., 末松弘行・河野友信・玉井一・馬場謙一編集, 「神経性過食症-その病態と治療-」, A5, 302 頁, ¥5,562 (税込), 1991, 医学書院. 1991. **31**(8): p. 655.
 28. Becker, A.E., et al., *Eating behaviours and attitudes following prolonged exposure to television among ethnic Fijian adolescent girls*. 2002. **180**(6): p. 509-514.
 29. 小澤夏紀, et al., 女性誌への曝露が食行動異常に及ぼす影響. 2005. **45**(7): p. 521-529.
 30. 諸井克英 and 小切間美保, 女子青年におけるダイエット行動におよぼす痕更身モデルの影響. 2008.
 31. 浦上涼子, 小島弥生, and 沢.J. 教育心理学研究, メディアの利用と痩身理想の内在化と

- の関係. 2015. **63**(3): p. 309-322.
32. Durkin, S.J. and S.J.J.J.o.P.R. Paxton, *Predictors of vulnerability to reduced body image satisfaction and psychological wellbeing in response to exposure to idealized female media images in adolescent girls.* 2002. **53**(5): p. 995-1005.
33. Stice, E. and H.E.J.J.o.p.r. Shaw, *Role of body dissatisfaction in the onset and maintenance of eating pathology: A synthesis of research findings.* 2002. **53**(5): p. 985-993.
34. Thompson, J.K. and E.J.C.d.i.p.s. Stice, *Thin-ideal internalization: Mounting evidence for a new risk factor for body-image disturbance and eating pathology.* 2001. **10**(5): p. 181-183.
35. Sands, E.R. and J.J.I.J.o.E.D. Wardle, *Internalization of ideal body shapes in 9–12 - year - old girls.* 2003. **33**(2): p. 193-204.
36. Stice, E. and S.K.J.D.p. Bearman, *Body-image and eating disturbances prospectively predict increases in depressive symptoms in adolescent girls: a growth curve analysis.* 2001. **37**(5): p. 597.
37. Stice, E. and K.J.D.p. Whitenton, *Risk factors for body dissatisfaction in adolescent girls: A longitudinal investigation.* 2002. **38**(5): p. 669.
38. パーソナリティ研究, 前J., *青年期女子の体重・体型へのこだわりに影響を及ぼす要因.* 2005. **13**(2): p. 129-142.
39. 田崎慎治 and 山.J. 学習開発学研究, *痩せ願望と友人関係, 主観的健康度の関連.* 2018(11): p. 41-47.
40. 食行動の心理学, 今J.た., *青年期の食行動.* 1996: p. 114-131.
41. Arroyo, A. and J.J.J.o.A.C.R. Harwood, *Exploring the causes and consequences of engaging in fat talk.* 2012. **40**(2): p. 167-187.
42. Ousley, L., E.D. Cordero, and S.J.E.d. White, *Fat talk among college students: How undergraduates communicate regarding food and body weight, shape & appearance.* 2007. **16**(1): p. 73-84.
43. Warren, C.S., et al., *The relationships between fat talk, body dissatisfaction, and drive for thinness: Perceived stress as a moderator.* 2012. **9**(3): p. 358-364.
44. Takimoto, H., et al., *Thinness among young Japanese women.* 2004. **94**(9): p. 1592-1595.
45. Thompson, J.K., L. Heinberg, and S.J.T.B.T. Tantleff-Dunn, *The physical appearance*

- comparison scale*. 1991. **14**: p. 174.
46. 松谷歩美 and 小.J. 同志社女子大学生生活科学, *瘦身願望と社会的比較 (I)*. 2011. **45**: p. 29-36.
 47. Christakis, N.A. and J.H.J.N.E.j.o.m. Fowler, *The spread of obesity in a large social network over 32 years*. 2007. **357**(4): p. 370-379.
 48. Stunkard, A.J.J.R.P.A.R.N.M.D., *Use of the Danish Adoption Register for the study of obesity and thinness*. 1983. **60**: p. 115-120.
 49. Thompson, M.A. and J.J.J.o.p.a. Gray, *Development and validation of a new body-image assessment scale*. 1995. **64**(2): p. 258-269.
 50. 繊維製品消費科学, 鈴.J., *新しい身体シルエット図 (J-BSS-I) の作成, 評価, および使用法*. 2007. **48**(11): p. 768-775.
 51. 社会心理学研究, 鈴.J., *新しいシルエット図による若年女性のボディイメージと身体意識の関連についての再検討*. 2014. **30**(1): p. 45-56.
 52. 續順子, et al., *女子大学生の体型意識分析*. 2016(47): p. 67-75.
 53. 釜谷真理恵 and 藤.J. 學苑, *他者の言葉が女子大学生の瘦身願望へ及ぼす影響*. 2010. **832**: p. 10-15.
 54. *日本肥満学会肥満症診断基準検討委員会 2011年*.
 55. Christakis, N.A. and J.H. Fowler, *Connected: The surprising power of our social networks and how they shape our lives*. 2009: Little, Brown.

付録

*1：体格区分については日本肥満学会の判定基準[54]に従い、BMI(Body Mass Index [Kg/m²])、体重 [Kg] / (身長 [m]²) 18.5 未満を「低 体重(やせ)」、18.5 以上 25.0 未満を「ふつう」、25.0 以上を「肥満」とする 3 区分としてする。

*2：社会的ネットワークには基本的性格が2つある[55]。

- ① つながり(誰と誰がつながっているか)、人々をつなぐ絆には特定のパターンが存在する
- ② 伝染(絆を経て流れていくもの)

*3：マサチューセッツ州フラミンガムで行われた、心血管疾患の危険因子の多くを明らかにした長期の疫学研究。12,000 人以上を対象に、32 年にわたって計測が行われた。この研究では、各参加者の親しい友人、同僚、家族の情報が示されている。Nicholas Christakis(2007) の研究においても、この情報からフラミンガムの町の社会的ネットワークを再現し、誰と誰がどのようにつながっているのか調べている。

*4：シルエット図選択法：痩せている体型から太っている体型までのフリーハンドによる複数の絵の中から現在の自分や理想の自分と思う体型の選択を求め、ボディ・イメージを知ろうとするものである。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方よりご支援を頂きました。

なかでも指導教官であり、主査でもある後藤励 准教授には、最も大きな感謝の意を表したいと思います。1年間に渡り丁寧かつ熱心なご指導を賜る中で、いつも新たな示唆を与えて頂いたことは自身の考えを深める上で大きな助けとなりました。心から感謝申し上げます。

また、副査を引き受けて下さった大藪毅 専任講師、木村太一 専任講師においては、研究の進捗に合わせた多方面からの貴重なアドバイスを頂き、研究内容を充実させることが出来ました。心よりお礼申し上げます。

さらに、同じ後藤ゼミのメンバーの大楠崇浩 氏、フ・イディエ 氏、丁 豪 氏、チェ・ユシン 氏にも厚くお礼を申し上げます。多様なバックグラウンドを持つ皆さまから頂く意見や、議論を通じて多くの知識や新たな示唆・刺激を頂きました。同じゼミのメンバーとして共に学ぶ時間を共有できたことを感謝致します。

そして、私を KBS に派遣して下さいだったイオン株式会社、イオンリテール株式会社にもお礼申し上げます。2年間業務から離れ、学びに集中する時間と環境を与えて頂いたことで、日々の業務だけでは得難い学び、経験、視座、交友関係を広げることができました。貴重な機会を頂いたことを心から感謝致します。

最後に、学業に集中するために2年間の生活を支援してくれた妻と子供にも心から感謝致します。

上記以外の様々な方々のご支援・ご協力を頂いたことで、本研究を1つの形として纏めることができました。この論文や2年間の学業生活で得た示唆を活かし、今後の企業・経済・社会の活動へと貢献していくことがお世話になった方々への恩返しだと考えております。

改めて、ありがとうございました。